

# 序 章

## 日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶……………	2
アメリカ側実行委員長挨拶……………	3
日米学生会議の歴史……………	4
過去の参加者からのメッセージ……………	5
宮澤喜一氏	
ヘンリー・A・キッシンジャー氏	
本文中の略語について……………	5

## 日本側実行委員長挨拶

第60回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 武田 尚樹

今一度、JASCの存在意義について考えてみたい。「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」発足当初、当会議はこのような理念の下に開催された。その意志を引き継いだ学生によって、今年度の第60回まで継承され、日米の架け橋としての役割を果たしてきた。しかし、目の前には「世界平和」という大きな課題が未だ残っている。我々にとって、創立当初の目的である2国間の平和的関係に満足することなく、世界へ、そして未来へと目を向けていかなければならない時にきているのではないだろうか。

時代の変化とともにJASCの担うべき役割は変容してきたが、両国間の相互理解の重要性はいつの時代も変わることはない。しかしながら、アメリカにおける日本への興味・関心が以前よりも失われつつある「ジャパンパッシング」と言われる状況が憂慮される今、現地の学生はもとより、アメリカの一般市民に対しても日本の「良さ」を伝える努力を続けていくべきではないだろうか。また、日米という2国間の枠組みに捉われずに互いの文化、歴史、価値観の相互理解を図ることで、世界の中の日米という見方に基づいた考えを構築していくことが必要である。

第60回日米学生会議は、「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」というテーマの下で開催された。このテーマは、日米関係及び、日米学生会議の意義を問い直し、新たな価値を創出していくことを目的として設定したものである。そしてJASCを通して学生の立場から自身の考え方や価値観の根幹を見つめなおす機会を設け、自己の役割を再考することで多角的に世界を見ることを期待した。また当会議では、フォーラムにおいて学生の立場から社会に向けて意見を発信していく機会が多々あった。特定の利益に拘束されない我々の視点から率直に疑問を投げかけ、周囲に対し既存の価値観を問い直すきっかけを創り出したかった。

当初の目標はアメリカで大きなフォーラムを開き、一人でも多くの方々を招いて我々の行っている活動や議論している内容を知ってもらうことだった。しかし、予算の問題やアメリカで一般の聴衆を集めることの難しさと直面した。結局思い描いていたような何百人もが集まるフォーラムを開くことができなかったものの、少人数ながら、一人一人と意見を交換し、価値観を分かち合うことができたのではないかと思う。本会議で

JASCの意義を一番感じたのが、モンタナでのWar and Peace Field Tripであった。そこではPeace Activist、第二次世界大戦従軍経験者、現役の軍人、地元の住民、そして日米の学生が大きな円を作り、戦争や安全保障についての意見を交わした。方法は異なるけれど、皆が平和を願って活動している。現役の軍人の方がPeace Activistに「I think people like you and I should talk more」と言ったときは感動した。JASCは小さな貢献かもしれないが、全く違う価値観が衝突し、分かち合うことができた瞬間だった。

もう一つの大きなJASCの意義というのが、“人の成長”であろう。1934年の会議発足以来、日米両国4000名以上の学生を輩出してきた。1ヵ月間の会議の中で学ぶことは多大であり、ときには挫折し、悔しさをバネに更に成長していくこともある。

大きな希望と夢を持って会議に挑んだ参加者にとって、大きな壁はいくつもあったと思う。思うように分科会が進まなかったり、ディスカッションで発言できなかったりと。私自身も「このような会議にしよう」と思いつつも多くの壁にぶつかった1年であり、自分の限界を感じることもあったが、学生のこれからの可能性を感じることも多かった。今回達成できなかった目標も、これを機に将来自身の力をつけることにより達成したいと強く心に誓っている。それはまさにJASCが与えてくれた“人の成長”というチャンスであり、他の参加者それぞれにもそういったことをぜひ感じてもらいたい。

JASCの存在意義というものは結局今分かることではないのかもしれない。20年、30年後に私たちが会議で得た経験を活かし、社会に、そして世界の平和に貢献しているかによって測られるものなのだろう。

最後になりましたが、第60回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助していただいた財団・企業の皆様、準備段階の勉強会でご指導賜りました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、ISC, Incの皆様、そして温かく現役の活動を見守って下さった会議OB・OGの皆様、1年間共に会議を一緒に作り上げた実行委員、そして会議で活躍してくれた参加者のみんな、また、会議成功のためご尽力いただいた全ての皆様へ、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

## アメリカ側実行委員長挨拶

Samantha Scully

Chairperson, American Executive Committee  
60th Japan-America Student Conference

I still clearly remember the hot August day in Kyoto, when we were elected as the Executive Committee for the 60th JASC. We promised to our predecessors that we would organize the best JASC. Of course, we had to then ask ourselves, how were we going to achieve the goal? Here, I would like to articulate a number of things that made the 60th JASC remarkably unique, successful, and significant.

“Students redefining their role through insight and action”, our 60th theme strikes a different chord, especially compared to previous conventional JASC themes emphasizing the Japan-America relationship. In the 60th, we focused on the role of students in the Japan-America global framework. How can we as both a conference and a generation redefine what it means to be a student? How do we confront our limitations, and how do we expand our opportunities as students? As future global citizens representing Japan and the United States, we challenged ourselves to offer creative insight and meaningful action.

To commemorate our long proud history, we initiated the JASC Time Capsule Ceremony at Reed College in Portland. I cannot imagine another site more historically appropriate than Reed College, the site of the first American hosted JASC. The JASC alumni recorded their favorite JASC memories into the time capsule, and invited our entire delegation to a wonderful dinner to celebrate the 60th JASC. Once again, we witnessed how JASC continues to strive with the undivided support it receives from the alumni community.

The 60th JASC witnessed a couple of first times in addition to the time capsule ceremony. The 28 Japanese delegates were selected from a record

high applicant pool of more than 250 applicants. Our cross-cultural engagement with the brightest future leaders of Japan was highly uplifting and rewarding. It was also the first time JASC visited Missoula, Montana. This was possible thanks to the generous invitation from the University of Montana and Maureen & Mike Mansfield Center. We were honored to have self-motivated delegates that helped coordinate an event with other important student organizations in Boston.

These are just a few of the many things that distinguish the 60th JASC from previous ones. In this comprehensive report, you will further discover not only what, but more importantly how we learned about the Japan-America relationship. Through active participation in a wide variety of cultural exchange, dinner receptions, academic roundtables, keynote speeches, host family experience, volunteer opportunities, business and government visits, we discovered numerous roles that need to be fulfilled to continue building the Japan-America relationship. We developed a stronger understanding of what it means to be a globally-minded student in today’s world. Through presentations and discussions, we have not only inspired each other, but also the larger communities in Japan and the United States.

My final remark is wholeheartedly dedicated to all of the generous JASC supporters. The success of the 60th JASC would have been unattainable without your dedicated support and benevolent contribution. On behalf of the 60th Japan-America Student Conference, I express my deepest gratitude to you. Thank you.

Sincerely,

Samantha Scull

### 日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協議会(国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下であり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみで開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米

国の同大学で開催することを決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間で学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、アジアだけでなくヨーロッパを含む諸国から学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立30周年であることを機に、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数理事を務めていた国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開することが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。

1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道

が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC, Incの協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側主催団体であるJASC, Incは、ISC, Inc (International Student Conferences)と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

## 過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣宮澤喜一氏

1939、1940年日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官ヘンリー・A・キッシンジャー氏

1951年日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

## 本文中の略語について

**JASC(ジャスク)**：日米学生会議(Japan-America Student Conference)の略。

**JASGer(ジャスカー)**：日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。

**ISC, Inc**：アメリカ側主催団体であるInternational Student Conferences, Incの略。

**EC**：実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。

**AEC**：アメリカ側実行委員会American Executive Committeeの略。

**JEC**：日本側実行委員会Japanese Executive Committeeの略。

**デリ、デリゲート**：日米学生会議参加者。Delegate。

**ジャバデリ**：日本側参加者。

**アメデリ**：アメリカ側参加者。

**アラムナイ**：日米学生会議の過去の参加者。

**サイト**：本会議開催地の意味。ポートランドサイト等。

**RT**：参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。Round Tableの略。

**リフレクション**：参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。



